クラーク室内管弦楽団
第 32 回演奏会

“第 11 回旅立つ人に捧げる演奏会”

2014 年 3 月 19 日（水） 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

L. v. ベートーベン（1770-1827）
「レオノーレ」序曲第 2 番 Op. 72a

J. シュトラウスⅡ（1825-1899）
円舞曲「春の声」Op. 410

W. A. モーツァルト（1756-1791）
交響曲第 31 番ニ長調「パリ」K. 297

指揮：奥　聡　（メディア・コミュニケーション研究院）

お問い合せ：011-706-6595
（工学研究院･フロンティア化学教育研究センター　下川部雅英）

プログラム・ノート

心理学者 D. K. シモントンによると、歴史に名を残す天才的創作家は、作品の質が高いだけでなく、多作であることも重要な特徴であると述べています。本日取り上げる 3 人も多くの作品を残した代表なクラシック音楽作曲家といえるでしょう。ただし、その特徴はそれぞれずいぶんと異なるようです。

ベートーベンは、新しく芽吹き始めた 19 世紀初頭のヨーロッパ市民社会で、大貴族や教会に恒常的に雇われるという形ではない作曲家のはしりと考えることが出来ます。作品の数も、歴史に残る名作も多いのですが、「これがベートーベン？」と首を傾げたくなる曲も散見されます。さまざまな事情によると思われますが、完成されたオペラは唯一『フェデリオ』だけで、それも何度も改訂を重ねた作品です。名前も厄介です。ベートーベンはこのオペラを『レオノーレ』としたかったようですが、以前に同じ題材で別の作曲家が書いたオペラとの混同を避けるため、劇場側の意向もあり『フェデリオ』とし、1805 年 11 月に初演。このときの序曲が、本日演奏する**レオノーレ序曲第 2 番 Op. 72a** であると考えられています。出来に満足しなかったベートーベンは、直ちにオペラ全体の改作にかかり、翌 1806 年春に再演しています。この第 2 稿目のオペラの序曲が現在「レオノーレ序曲第３番」として知られている作品のようです。ベートーベンはさらに、このオペラのプラハでの再演（1807 年）のために序曲を書き換え、それが現在の「レオノーレ序曲第 1 番」ということです。さらに、台本も改訂され音楽も改訂されたオペラとして、1814 年に再演されています。この第４版となる序曲が現在「フェデリオ序曲」と呼ばれているものです。つまり、1 つの題材で書いたオペラに 3 つの版があり、その「序曲」が 4 種類ある、ということになったわけです。（オペラのあらすじは省略しますが、「レオノーレ」がこのオペラのヒロインで、彼女が「フェデリオ」という名の青年に扮装して登場します）。序曲第 3 番はご存知方が多いと思いますが、それとの聞き比べも興味深いかもしれません。

ヨハン・シュトラウス II は、いわずと知れたワルツ王。曲の数も膨大です。旅立ちの季節、春の兆しを感じていただければと思い、**春の声**を演奏します。

モーツァルトも多作の天才でしょう。ベートーベンに比べると、いわゆる書き直し・改訂をほとんどしなかったといわれています。**交響曲第 31 番ニ長調「パリ」**は、20 歳を過ぎたモーツァルトが窮屈なザルツブルクを飛び出し、母親と「就活」の旅に出ていた時期の作品です。ザルツブルクに残った父レオポルトとの手紙のやり取りが大量に残っており、そのおかげでわれわれは当時の様子を知ることができます。大都会パリのお客さんを喜ばせようと張り切って作曲した様子が目に浮かぶような作品ですが、パリ滞在生活の実態は相当悲惨なもののようでした。名人 4 名をソリストにした力作「協奏交響曲」は楽譜が紛失し（ねたんだ地元作曲家が盗んだという説も）、また最愛の母もこの時パリで亡くなっています。職は見つからず、子どもの頃に訪問した際には暖かく迎えてくれたパリの貴族たちにも冷遇されるといった状態でした。しかし、そのような実生活上の悲惨な気分が一切感じられない作品になっています。天真爛漫なモーツァルトらしい気分は、旅立ちの季節にはぴったりかもしれません。

（メディア・コミュニケーション研究院　奥　聡）